

## 草創期の中国文藝座談会・『中国文学論集』

岡村, 繁  
九州大学名誉教授

<https://doi.org/10.15017/20550>

---

出版情報：中国文学論集. 40, pp.1-7, 2011-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## 草創期の中国文藝座談会・『中国文学論集』



岡村 繁

〔岡村繁先生〕

ただいまは過分なご紹介をいただきまして恐縮いたしております。私も九州大学を退職してからだいぶ年月が経ちまして、当然のことながら今日初めてお目にかかる方々も多いので、話らしい話にはなりませんけれども、しばらく草創期の頃の中国文藝座談会や『中国文学論集』について、その思い出をお話することにいたします。ところで私は昔から日記をつけることなど全くしておりませんので、今日もお粗末ながら、記憶だけを頼りにお話させていただきます。

今もご紹介にありましたように、私は、幸いにして、この伝統ある九州大学へ、今から四十五年くらい前に赴任して参りました。それまでは名古屋大学や東北大学におりました。ところで私は、それまで赴任するたびに、最初の駅に降り立ちました際には、「ここで骨を埋めよう」と一応は堅く心に誓いました。例えば、仙台に赴任したときも、最初仙台駅の階段を降りながら、「ここが俺の死に場所になるのだ。」と思っておりますのですが、この東

北大で三年くらいおりましたところ、その頃まだ九州大学におられた目加田誠先生が、突然わざわざ九州から仙台の拙宅までお越しになりました。「来年私は九大を定年で辞めるのだが、その後継ぎに来ないか。」というお誘いを頂きました。私は大変驚きましたが、余りにも有り難いことですので、最後にはこれをお引き受けすることに致しました。

かくして九州へは、始め半年ほど私は単身で九州に来ておりました。それが昭和四十一年のことです。私は四十三歳になっておりました。研究室では、合山究さんがまだ大学院生でしたし、やがて後に岐阜大学へ赴任した安東俊六さんもまだ学部四年生でした。しかし、研究室そのものの総勢は、大学院と学部を合わせても、まだまだほんのわずかでした。とはいえ、そうしているうちに、やがて竹村則行さんたちが学部へ進学して来られるなど、だんだんと研究室のメンバーが増えて来まして、いよいよ「それでは、ひとつ皆さんに本格的な勉強をしてみらおうか」と思う事態になってまいりました。しかし、単に勉強をしているだけでは業績にならないので、その成果を発表する場所が必要になってまいります。もちろん、先程ご紹介がありましたように「中国文藝座談会」という毛沢東よその研究会が、私の来る以前からずっと続いてはおりました。しかし、その座談会で口頭発表しただけでは、他所よその大学でその人を採用してはくれません。そうしますと、どうしても論文発表をしておかないといかんこととなります。ところが論文発表するには、それを発表するきちんとした論文集ができていないといけません。なぜならば、現今は各大学の教授会で人を採用する時には、全部投票で、素人の教授も皆同じ資格で投票しますので、そういう教授たちにもある程度説得力があるような、形になったもの（論文集）を前もって作っておかないと、なかなか賛成の票を入れてくれません。とにかく今頃の新制大学では、そうしたシステムになっていましてね。かつて旧制（大学）の時には、その主任教授だけが「うん」と言ったらそれで万事うまくいったらしいのですけど（笑）、このごろは民主主義で（笑）、そういうわけにはいかなくなったのです。そうすると、それなりの対応をこちらでおかねばなりません。また、たとえ他所の大学でこの対応をしてくれなくても、こっちはこっちでおかねければ、到底この競争相手の先を越すことはできないと、まあそのようなことで前述の研究会を始めたわけです。私が赴任して来ました時は——それはもう大変情けなかつたですけれども——この九大中文研究室には学問的な体制が

ほとんどできていなかった。私は「これじゃあ、いかん」と思いました。

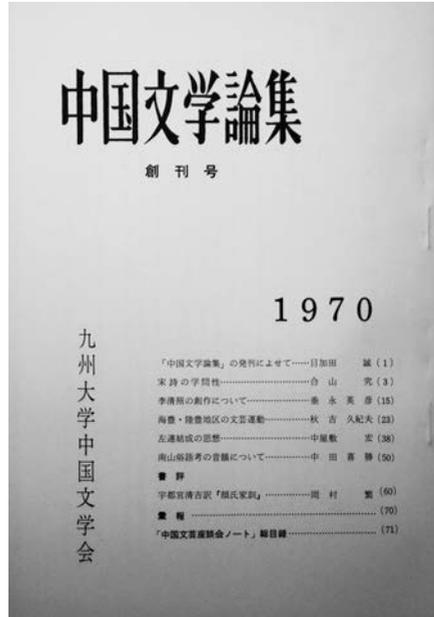
まずは、今までの「文藝座談会」は、——この「文藝座談会」という名称そのものも、どうも中国からの借り物らしくパツとしませんけれども——これまでも一挙に止める訳にはいかないので、「文藝座談会」という名称だけは残そう。しかし、その内容は学問的なものに刷新し、口頭の研究発表は、そういう学問的な研究論文の準備段階のようなものを発表する会にしようと、そういうような方針を決めました。

かくて、その研究発表をいよいよ文字印刷として発表してもらおう段階になってきますと、発表誌の名称が『文藝座談会ノート』では軽過ぎるのです。それで、先程も申し上げましたように、新しいもの（論文集）を作らざるを得ないと思うようになりました。しかし情けないことに、研究室の学生の人数は、大学院と学部を合わせても全部でたった三人か四人でしょう。すると薄いものでも一冊の論文集を出そうとしますと、ずいぶん費用がかかるのです。しかし当時その費用はどこからも出ない。「さあ、困った」ということになりました。

そうしましたら、幸いにして、今は福岡大学に在職している劉三富（笠征）さんが台湾から九大中文に入ってきたのです。思えば当時、まだ全国どこの中文の研究室も考え付かなかったことなのですが、私は「それじゃあ、台湾の方で印刷したら」と思い付いたのです。しかも、幸いにしてここ福岡は台湾に最も近い（笑）。それで私は、「劉君、今度台湾に帰った時に、われわれの論文集を印刷するのに適当なところがあつたら探ってきてくれ」と依頼しましたら、やがて劉さんは、幸いにして「先生、いい印刷所が見つかった。その主人が、それをやってもいいと言っている。しかも費用の方も割合に安い」というので、「それじゃ願ったり叶ったりだ」ということになって、ついに台湾で印刷することを決めました。

それから以後は、校正など厄介なことがありますけれども、これはすべて私が台湾に出向いてやれば済むことであり、私一人で行くくらいの旅費は私の持ち金だけで足りえますから、私は台湾へ何回か出向き、事実、その印刷所の店先で、校正を何回かしてきました。「編集者注：台湾での『中国文学論集』の印刷は、一九七九年第八号から一九八九年第十八号まで十一年間続きました。」

かくて『中国文学論集』の創刊号が出たのが昭和四十五（一九七〇）年五月。やっと『中国文学論集』の第一号



を出すことができました(写真参照)。「やっとこれで念願が叶った——」と思つて、私はとても嬉しかったです。この表紙も、もし業者に書いてもらうとしたら、当然それなりの代金があるわけです。しかし当時その金はない。ところが、私は若い時から絵が比較的うまく、字も上手な方でした。そんなわけで、このようなデザインを書くのも好きだったので。(表紙の「中国文学論集」のタイトルを示しながら)それで、これ全部私を書きました。一晩がかりで。

そうしたら、九州中国学会の会長、その当時は岡田武彦先生でしたけれども、岡田先生から「『九州中国学会報』の題字も書いてくれ」という話が出まして(笑)、また一晩がかりで『九州中国学会報』という表紙も、私がデザインして書いていますでしよ(笑)。

そして、これを全国の大学研究室へ送ったのです。この表紙の字ですが、私は他所よそよりもちよつと変わった特徴を出そうと思ひ、さらに体裁もよくしようと思つて、初めのうちは少し変則的に左に寄せるようにして印刷していたのですが、今はいつの間にか真ん中に出て来ましたね(笑)。どっちでもいいんですけれど(笑)。初めはこのように左寄せにしていたのです。とにかく、これが出た時、私は本当に嬉しかったです。かくして昭和四十五年(一九七〇)に第一号が出て、それからもう、皆さんのご努力で、今もずっと続いております。『中国文学論集』は、もうこれで学界でも定着致しました。

まあそのようなことで、一番最初に申し上げましたように、『中国文学論集』の草創期の頃は、まず人数も会員も少なかつたし、費用も無かつたというわけで随分苦労しましたが、幸いにして台湾での印刷を利用することで、

学問的レベルを下げることに無しにやれました。

一方、授業も、新制大学になってからは、他所よその大学では皆旧制の時よりレベルを落としました。新制大学は高等学校から直接に学生が来ますからね。昔は中学と大学との中間に旧制高校がありましたから、授業でも相当難しいことができたのです。けれども私は、「昔のレベルを落としてはいかん」と思いついて、赴任して来た時から、自分の学問に対しても、大学院の教育に対しても、旧制大学と全く同じレベルでやってきました。それは結局は成功しました。よかったです。あんな民主主義的な制度に妥協していたら、九州大学は今頃とはつくにふっとんできますよ（笑）。あのようではいけません。

大学院生は学術的なものを書けばよい。私は、そのことを絶対条件に致しまして、今まで研究や講義を続けて参りました。まあそのようなわけで、しゃべっているうちに（腕時計を見る）、時間もだんだん経って参りました。

とにかく、当時は学生諸君もよく勉強して下さいませ。中国文藝座談会も隆々たる学会になって参りまして、大変嬉しく思っております。

思い出を話すと言っても、私には日記も何も無いものですから、これくらいしか思い出せないのですが、まあ、後は皆さんに補っていただいて、今後ともに、この中国文藝座談会、そして『中国文学論集』が、ますます発展致しますようにお祈りいたしまして、簡単ではございますが、私の発表ということにさせていただきます。

どうも御静聴有難うございました。（拍手）

〔質問・中筋健吉会員〕

本日は岡村先生が赴任された頃の文藝座談会、そして『中国文学論集』の最初の頃のお話を拝聴致しまして、どうも有難うございました。ところで我々にとつて、学生時代の「演習」というと、まずは岡村先生の『文選』演習でして、本当に中国学の基礎をたたき込んでいただきました。それから私の世代の少し後には『説文解字段注』の演習がありました。そこで、あの『文選』演習なのですから、あのような演習のスタイルというのは、岡村先生が九州大学に赴任されて、最初に始められたのでしょうか。

〔岡村繁先生〕

最初はちよつと皆さんの実力が判らないものですから、いきなり私のやりかたを押し付けても、これは勉強になりませんので、初めの半年間は、今までのレベルに合わせました。かくて、今までのレベルと、そして私が目指しているレベルのちよつど中間ぐらいのところで、最初に読みましたのが、各時代の正史の中の「経籍志」や「儒林伝」などの学術史で、それを半年間続けました。

その時は、最初皆さんに読ませてみたら、読めないんですよ（笑）。だから、もう情けなくなりましたけれども、かくなる上は、面倒でも一人一人を鍛えないといかんと思いましたから、それで当番を決めまして、今も皆さんご存知のように、一人ずつ教師のいるここ（演習室の正面）に座ってもらって、発表してもらいました。そして、私は横で聞いていて、足らないところは突いてゆくと（笑）。こういうことで鍛えることに致しました。そうしたら、皆さんよく勉強してくれましたね。皆さんご存知のように、演習ではもう磔はりつけに遭うたように皆さんに勉強していただいたから、お蔭様でよくできるようになっていただきました。嬉しかったです。もともと素質のある人が九大に入ってくる訳ですから、鍛えようによつて、どれほどでも鍛えることができ、嬉しかったです。

〔司会〕

貴重なお話を伺っているうちに、ちよつど時間も参りました。

本日は第二五〇回の中国文藝座談会を記念して、岡村繁先生から、四十年前の草創期の頃の文藝座談会や『中国文学論集』の産みの苦勞話を伺うことができました。後輩の我々にとって本当に良い機会でした。

岡村先生には、これからもますますお元気で、我々を指導して下さいますようお願い申し上げます。

それでは、これで第二五〇回の中国文藝座談会を終わります。

（二〇一〇年十一月十三日、教育学部一階会議室にて開催）



講演会風景



参加者合影